ヒロシマ ユネスコ

ユネスコ会員綱領

心の中に平和の守りを固めよう
すべての人間の尊厳を重んじよう
教育・科学・文化の発展に努めよう
民族間の疑惑と不信を除こう
世界を友愛と信頼のきずなで結ぼう

結成二十周年を迎えて

広島ユネスコ協会会長　松原博臣

ヒロシマ・ユネスコ創刊号によれば、昭和四十八年六月二十三日にキリンビヤホールで広島ユネスコクラブ発会式が行われ、翌四十九年の総会で「広島ユネスコ協会」と名称変更し、協会連盟加盟承認される、と記されている。

広島市においては、すでに昭和二十四年に広島ユネスコ協力会が結成され、かなりの実績を挙げながら、昭和三十五、六年ごろに自然消滅している。

昨年の総会で、二十周年記念事業特別委員会を設置して準備を進めていくよう挨拶で述べたが、七月四日の理事会で二十周年事業検討委員会の設置が決められ、十一名の検討委員によって、二度にわたり慎重審議され、次のような報告を九月二十一日に受けた。

一、出版事業について
　1　二十周年記念誌の出版
　広島ユネスコ協会結成から今日までの活動の沿革
　戦後活動した広島ユネスコ協力会について、生存者も少なくなり資料も散逸しているので、証言を集め、記録を残したい。
　2　「ヒロシマ・ユネスコ」の復刻
　3　出版経費との関係から、1または2のみの出版、あるいは1・2の合本も考えられる。
二、記念行事について
　広島ユネスコ協会の活動を市民の方々に知ってもらうため、アジア大会の前年ということを考えてアジアというテーマで次のような行事が考えられる。
　1　有識者の講演と祝賀会
　2　展示会
　3　広島大学APEID事業の協賛
　以上のような答申に基づき、今後進めていきたいが、目を外に向けると、「文化間の対話」というテーマで「パリ日本文化祭」が、四月二十九日から五月十五日まで、ユネスコ・パリ本部を中心に開催される。五月十二日には日ユ協連が共催しているヒロシマ国際アマチュア映画祭の優秀作品上映会と平山郁夫副会長の文化講演会も予定されている。出来ればツアーでも組んで参加してみたいと思う。また秋には新友好提携締結書に基づく北京からの訪日団をお迎えしなければならない。会員各位の絶大なお力添えをお願いする次第である。

日中ユネスコ交流協定に調印

一九八八年に始まった日中ユネスコ友好姉妹協会交流計画は四年間の協定の最終年にあたる昨年、広島ユ協伊東亮三常任理事を団長とする代表団（10名）が中国を訪問、中国教育国際交流協会、北京市ユネスコクラブと新たに四年間の協定を締結しました。

調印式は十月二十一日、中国教育国際交流協会で行なわれ、中国側は同協会李滔副会長、北京市教育局蘭宏生副会長そして訪中団の全日程に同行された同教育局長紅生外事処長らが、日本側は広島、新参画の福島、郡山各ユ協と協定最終年で退く岐阜ユ協、これに日ユ協連のメンバーが出席。調印に先立って日中の代表がそれぞれ四年間の成果を踏まえてさらにユネスコ間交流および日中間の友好関係促進の意志を表明して協定書に調印しました。

このあと訪中団は、北京市、福州市、汕頭市、潮州市、上海市の教育国際交流協会、教育局を公式訪問し、見学先の学校を含めて熱い歓迎を受け、交流を深めました。

北京を北限に亜熱帯地域まで移動した〝南走北飛〟の旅は、社会主義市場経済を地でゆくめざましい変貌と蘇州などの古いたたずまいに接する実り多い十日間で、一九九三年秋の再会を現地に約して帰国の途につきました。（報告は次、次々頁）

編集・発行／広島ユネスコ協会（事務局：広島市東区牛田新町1丁目8－3　広島市牛田公民館気付　☎〈082〉227－0706）

地域リーダー養成講座に参加して

松岡盛人

一月三十日、三十一日の二日間、松山市総合福祉センターで行われた研修会に参加しました。

思えば、この種の研修会参加は広ユ協に青年部誕生のきっかけとなった十八年前のユネスコ青年セミナー以来（編集部註・当時の青年部長）のことです。

今度の講座では、世界寺子屋運動のビデオ鑑賞に始まり、日ユ協連の米田伸次理事による「あたらしい民間ユネスコ運動の創造をめざして」の基調講演、街中に繰り出しての車いすの操作と乗車体験、「地域資源の活かし方」というテーマでの地域づくりの実践事例紹介、さらに「地域の国際化」テーマのグループディスカッションでは、シュミレーションとして愛媛の特産物を切り口とした「オレンジによる国際交流」を企画しました。

今回の研修を通じて、各地で若い人たちがユネスコ活動に燃えていることを改めて知り、広ユ協にも若い人たちの参加を得て、世代を超えたメンバー構成で、広島の地域性を生かした息の長い、より魅力的な活動に汗とチエを結集できればと思った次第です。

折りしも研修終了当日、私の現在の勤務地である岡山市で（註・筆者は広島郵政局から岡山市役所に出向中）ユネスコ協会の発会式が開かれるというホット・ニュースが入ってきました。

刺激と感動の二日間でした。

（会員）

国際交流サロン（下半期）

▼10月14日「ありがとうで国際交流」ヒューマンウェア研修所代表取締役　清水英雄氏。

▼1月23日「広島・北京友好姉妹提携訪中団報告」伊東亮三、亀井章、古田碩永、竹沢臣子、各常任理事。

▼2月27日「国際化社会の中でなにが平和をもたらすか」岩国ユ協会員三原善伸氏。

三原氏は山口県出身。17歳のとき高校ユネスコクラブでユネスコに出会い、以後43歳の今日までユネスキャン。現在岩国市教委勤務。

広島仕立てのパリ日本文化祭ツアー

「文化間の対話」をテーマにパリ日本文化祭が、今年四月二十九日から五月十五日まで、パリのユネスコ本部を主会場に、開かれますが、この文化祭で日本ユネスコ協会連盟、広島市などが実質主催しているヒロシマ国際アマチュア映画祭の優秀受賞作品が公開上映されることもあって、現在、広島ユ協で文化祭見学を兼ねたヨーロッパ訪問ツアーを計画、募集しています。

その計画案は5月9日（日）広島空港発、香港夜景鑑賞と海鮮料理の夕食を終えて、10日パリ着、市内観光、11日自由行動、12日ヒロシマ国際アマチュア映画祭上映会と平山郁夫講演会参加、13日パリ発スイス・ジュネーヴへ、市内観光、14日モンブラン観光、15日チューリヒへ、チューリヒ空港発、香港経由で16日広島帰着。全朝食付、一部昼・夕食付で一人三九八、〇〇〇円の予定です。

なお、パリ日本文化祭は、ユネスコ、国際交流基金、駐仏日本大使館などの主催で開かれるもので、「日本と世界の文化の相互作用を提示して、21世紀の多様化社会における日本の役割を探る」を目的に、日本からは福井謙一、大岡信、丹下健三、勅使河原宏、観世栄夫氏をはじめ能、和太鼓、生け花の出演団体が参加、東山魁夷、平山郁夫作品展などと併せて日本文化を披露することになっています。

参加希望者は事務局まで。

'93広島ユネスコ講演会「アジアの民話、広島の民話」

語り手　山口　崇（俳優）

〈講師紹介〉

この20数年間、国内、アジア諸国の取材で千数百話の民話を収録。その成果は放送、国立民族学博物館資料として、また著者「昔ばなし出逢いの旅」などに結実。テレビ、舞台で活躍中。長唄三味線の邦楽家としても有名。

〈日時〉　3月18日（木）　18時30分

〈会場〉　アステールプラザ中ホール（中区加古町）

〈主催〉　広島ユネスコ協会、広島市文化振興事業団

〈後援〉　広島市教育委員会、広島アジア競技大会組織委員会、広島市公民館連合会、国際ソロプチミスト広島、国際ソロプチミスト広島・もみじ

〈協賛〉　広島そごう

※入場無料。参加希望会員は予め事務局へご連絡ください。

受賞（彰）祝賀会開く

昨秋、広島ユ協松原博臣会長が広島文化賞（広島文化振興基金）を、本家正文常任理事が秋の叙勲で勲四等旭日小綬章を受けられ、これを祝って一月二十三日、広島市本通りアンデルセンで新春の懇親会を兼ねてパーティを開催しました。席上、お二人に記念のトロフィーを贈り喜びを共にしました。

訪中報告

忘れてはならないこと

伊東亮三

一九九二年度日中民間ユネスコ交流計画にしたがい、広島のメンバー四名、岐阜県ユ協二名、福島ユ協二名、郡山ユ協一名、それに日ユ協連一名の計十名で昨秋十月二十日より三十日まで中国を訪問し、また、同時に本年度より四年間の交流協定に調印してきたことを報告申しあげます。

かつての十五年戦争における日本軍および日本人の中国に対する残虐行為を知るものは、とうてい観光旅行などに中国に行けるものではなく、私もこの年齢まで中国に足を踏み入れていなかった。東京大学出版の「新しい世界史七・日本民衆の戦争体験」などを読みますと、杭州湾に上陸した日本軍の中国民衆に対する強盗、暴行、殺人の赤裸裸な記録が綴られています。その頃の日本兵はいま七十歳以上でしょうか。その人たちの当時の行為を思うと、恐ろしくて中国などに行けるものではありません。

それに対し、われわれ訪中団との調印式の席上で、中国教育国際交流協会副会長李滔氏の挨拶は「中国は玄関を開けて待っております。北京だけでなく中国各地にユネスコクラブができるよう努めてほしい」でした。

歴史をかじっている者として、私は、あと何世紀かは、日本人は中国人に赦してはもらえないだろうと思っています。加害者は忘れても被害者は忘れるものではない。ユネスコ協会の交流も、このことを決して忘れてはならない。このことを常に念頭に置き、物見遊山の気持で訪中すべきではないと考えています。

訪中報告

不易流行が共存

亀井　章

訪中団の一員として友好、親善を深めるという第一義の使命を認識しつつ、一行の皆さんとは別に、私は二つの任務を自らに課しました。

一つはヒロシマ国際アマチュア映画祭受賞作品の現地（北京・上海）上映。もう一つは訪中団の公式行事を核に日中ユネスコの交流、親善の模様を帰国後テレビ放映する、そのための記録撮影でした。

前者については、中国語版ナレーションを作成するなどの心血を注いだにも関らず、手違いにより実現せず、上映予定のVTRテープを北京ユネスコに寄贈するに止まりました。

〝手違い〟の基底には、視聴覚媒体の威力に対する認識度の違いがあったのではないかと思ったものです。と申すのは、私たちが街頭、観光地、移動の沿線で見た文字、漢字の躍動ぶりです。橋梁には揮毫者名入りの橋の名前が毛筆で書かれ、国策推進キャンペーンの横断幕には文字が躍っています。洗濯機の広告板に絵が描かれたのを一、二件見た程度でした。

この文字文化優位の様は、媒体の進歩の遅れということではなく、中国の文化そのものであり、また日本の文化の原型をも想起させる風景でもありましょう。私は、かつて書道の時間に書いた〝不易流行〟の〝不易〟の墨書を思い出していました。

ところで、訪中団に全日程を同行され、コーディネートされた丁紅宇さんの最終日の夜の宴で述べられた挨拶の一部に「私の今回の出来は百点満点の61点。六百キロのバス移動が減点15、VTR作品の上映が実現しなかったので減点10……」とありました。「ああ、やっぱり上映実現のために努力されていたのだな」と改めて知り、私の落胆は、感謝の気持ちに変わったのでした。

二つ目の任務、テレビ放映のためのビデオ撮影は初めての経験とあって、帰国後の再生では眼も当てられず、なけなしの場面を放映しつつ、伊東団長の明快な談話で補っていただきました。おしなべて私の得点は59点です。

日中ユネスコ友好姉妹協会締結書

1984年、社団法人日本ユネスコ協会連盟と中国教育国際交流協会は、「日中民間ユネスコ交流計画協議書」を締結して以来日本国、中華人民共和国両国のユネスコ交流の発展、並びに日中民間ユネスコ活動の促進のため積極的に努力を重ねてきた。

同交流計画による双方の密接な友好関係の成果をふまえ日本国の地域ユネスコ協会と中華人民共和国の地域ユネスコ組織の交流をますます促進することをめざし、ここに日中双方合意のもとに「ユネスコ友好姉妹協会」を締結する。

1．日本国・郡山ユネスコ協会、広島ユネスコ協会および福島ユネスコ協会と中華人民共和国・北京市ユネスコクラブは友好関係を樹立する、両者は随時ユネスコ活動資料図書を交換する。

2．1993年度と1995年度は、中華人民共和国側が北京市ユネスコクラブ代表団を日本国に派遣する。1994年度と1996年度は日本国側が郡山ユネスコ協会、広島ユネスコ協会および福島ユネスコ協会代表団を中華人民共和国に派遣する。

3．日中双方とも派遣団の往復渡航費は派遣側の組織あるいは個人が負担し代表団受け入れの際の国内諸経費（食費、宿泊、交通費など）は受け入れ側が負担する。

4．代表団の訪問日数は各々10日間、団員は7人で構成する。増減については両者で話し合い処理する。

本協議書の有効期間は4年間とする（1993年1月1日～1996年12月31日）締結期間中の改変などについては、両者の協議に基づき、合意のうえ決定する。

この締結書は日本語と中国語で記し双方とも同じ効力をもつ。

1992年10月21日

訪中報告

温い歓迎に感謝

古田碩永

日中民間ユネスコ交流計画に基づく中国訪問団の一員に加えていただいて、はじめての中国の地を踏んだ。十日間の旅は、見るもの、聞くものすべてが自分にとっては貴重な体験であり、いま思い出せば、様々なことが脳裏に浮かんでくるが、限られた字数で報告をするとすれば、まず受け入れていただいた中国側の大変友好的な、温かい歓迎ぶりをあげなければならない。

広島の地においても、中国からの留学生と接する機会もあり、中国の人の温かさ、大人ぶりは感じていたことであるが、今回北京空港に降り立ち、上海空港から飛び立つまでの間、終始我々一行のお世話をしていただいた北京市教育局外事処長の丁紅宇氏、通訳の司占術氏の笑顔を絶やさない献身的なもてなしにさらにその感を強くした。

また、福州市、汕頭市、潮州市、上海市などの訪問時には、それぞれの受け入れを担当された教育局、教育国際交流協会の方々に、本当に心から、誠意ある熱烈歓迎をしていただいた。

汕頭市同文書院小学校訪問はあいにくの日曜日でもあったにも拘らず、校長先生以下全スタッフが出迎え、説明に好意的な対応をしてくれたし、翌日の第一中学校では生徒たちが校門両側に並んで我々一行を拍手で熱烈歓迎してくれた。

こうした温いもてなしぶりは数えあげればきりがないほどであったが、これらは我々にも大きな示唆を与えてくれたのであった。中国教育国際交流協会の李滔先生が、姉妹協会締結調印の際のあいさつで、〝民間交流が双方に発展を促す。玄関は開けている〟と、今後の交流に期待を寄せられた。国と国との理解には国民一人ひとりの理解が有効である。今後四年間、さらに心と心をつなぐ交流ができればと思っている次第である。

訪中報告

ユネスコと中国と私

竹沢臣子

中国はとても近く、たくましく、包容力のある大きな国でした。これといったテーマも持たず出発したものの、たくさんの宿題を抱えて帰った今回の訪中でした。そして広島ユネスコ協会が方向性の確かな素晴らしい団体であると改めて気付いた事が私にとっての一番の成果だったかもしれないと感じています。

全日程を同行された丁紅宇さんは、要職につかれているにもかかわらず、気さくで、私達に空気のように接して下さいました。日本語が通じないのが不思議なくらい違和感がなく、中国の現状や希望等私達の問題点も含めて話し合う事ができました。大きな中国のしかも多くの人々の中の一人ではありますが、きちんとした情報を得たのではないかと感じています。この秋の訪日団のメンバーと伺っています。再会を楽しみにしている人です。

PTAに関わる者として移動の間、目はいつも学校を捜していました。すぐに見分けのつくはずの学校がなかなか目につかず不思議でした。当然あるはずの広い運動場がなかったからかもしれません。しかし、徳育、知育、体育は教育の基本として、ここでも掲げられ、何よりも礼を重んずるとのことでした。日本の教育に学び、これから初等、中等教育に力を注ぐと言われた汕頭の教育長の言葉に、日本の現況が頭をかすめ、「教育」を考えさせられました。

交流事業の推進を図る一員として、上海教育局の王さんの言葉は強烈でした。「日本人は中国人を自分と同じ考え、価値観を持っていると思い接してくる。私達は国が違い、言葉も違い、当然考え方、価値観も違う。そんな違いを認めるところから出発してほしい」

美味しい料理、温かな心に感動しながら、ユネスコの活動に手応えを感じた二週間でした。

第15回高校生のつどい開く

永田龍男（常任理事）

「先生、先生。これ、ホンマにもらってええんかね？」広大附高のI君達が募金箱を大事そうに抱えて走り寄る。覗いてみると紙幣の福沢諭吉が静かに微笑みかけてきた。「タマゲた。若い男の人じゃった」彼らの興奮は更に続く。

暮れも押し迫った12月20日「第15回高校生のつどい」は開かれた。日程の折り合いがつかず例年になく遅い時期の開催となったが、中には予定していた塾講を返上して参加した生徒もいると聞く。

「つどい」では、第2回海外研修参加者からの研究発表、第一女子商高による「エイズの研究」発表をとおして、共に生きるためのみずからの関わりを中心に話し合いがなされた。

「コーアクション街頭募金活動」では冒頭の場面もあって、過去最高額の五八、七八〇円もの浄財が寄せられ、第一女子商高文化祭での収益金三三、四七三円とともに、識字センター建設基金の一助として日ユ協連へ送られた。わずか一時間半とは言え、そぼ降る氷雨の中を震えながらの広島そごう前での実施であった。

〈街頭募金活動・広島市紙屋町〉